



南部陽一郎先生

Yoichiro Nambu

University of Chicago 提供 Lloyd DeGrane 氏撮影

## 南部先生からのメッセージ

今回は多くの皆さんにすばらしい解説論文を書いていただいて感激いたしました。厚くお礼申し上げます。一応目を通しただけですが、これから詳しく読ませていただきます。

思い出せば私が物理をやろうと考え始めたのは、ちょうど旧制一高（今の東大駒場キャンパス）に入ったころ、湯川の名前が世界的に有名になったからでした。勿論“湯川中間子”が何だかはまったく分かりませんでした。私がSSBの概念に到達し、すぐ素粒子論に応用できたのは、東大で核物理も物性論も学び、特に多体問題に興味を持っていたこと、戦争後東大の嘱託になったときには、近くで朝永さんがQEDの仕事を始められたこと、シカゴではいろいろな専門の研究者たちの間に密接な交流があったこと、Bardeenのグループが近くにいる、いち早くBCS理論を知ったなど、幸運が重なったからだと思います。

湯川パイオンがSSBのためであることに気がついたとき、また湯川の名が現われた、予言された最初の新粒子がそれだとは何故だろう、ちょっと不安に思いました。しかしパイオンが擬スカラーであることが分かったのは多くの学者の努力の結果であり、50年代にはすでにほかのメソンも発見されていたので、一番軽いパイオンがSSBに関係しているのはもっともだと、やや安心しました。残る問題は質量がゼロでないのにSSBと結びつけてよいかです。厳密な論理に従わなければ人を説得できないではないか。

ここで坂田さんの影響が現われます。私は中等学生時代から唯物弁証法に興味をもって、マルクスやエンゲルスの著書を読んでいたのは当時の流行（あるいは禁断の果実）を追ったといえますが、坂田さんがそれを物理の研究に適用されたのはわれわれに大きい刺激を与えました。だから真理は発展する、SSBを破る理由がまだ隠れていてもよいではないか。こう考え直してあの論文を書いた次第です。あとで“current quark mass”や“anomaly”が出てきたとき、たいへん満足に思いました。

南部 陽一郎

2009-04-01（ただし April Fool ではない）